

F. パッペンハイム 著
栗田賢三 訳

近代人の疎外



岩波新書

387



F. パッペンハイム著
栗田賢三訳

近代人の疎外

栗田賢三

1900年長崎市に生まれる

1925年東京大学文学部哲学科卒業

現在—岩波書店嘱託，日本哲学会会員

編書—「社会主義と自由」(岩波新書)

訳書—エンゲルス「反デューリング論」

マクファースン「現代世界の民主主

義」(岩波新書)

近代人の疎外

岩波新書(青版) 387

1960年7月18日 第1刷発行 ©

1973年3月20日 第20刷発行



訳者 あわ た けん ろう
栗田賢三

東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行者 岩波雄二郎

東京都新宿区改代町24
印刷者 田中昭三

発行所 東京都千代田区 株式会社 岩波書店
一ツ橋2-5-5

落丁本・乱丁本はお取替いたします

理想社印刷・永井製本

イ
ヴ
ォ
ン
ヌ
に

岩波新書について

岩波新書赤版百冊が刊行されたのは、日中戦争の始まった直後から太平洋戦争たけなわのころに及ぶ、忘れえないあの苦難の時期においてであった。当時の偏狭な国粹思想の横行に対抗して、偽りなき現実認識と、広い世界的観点と、冷静な科学的精神とを普及し、日日につのってゆく言論抑圧の下に、なお、ヒューマニズムの精神を保持し、国民の自主的な生き方に資したい、という念願こそ、この双書創刊の趣旨であった。戦争は惨憺たる敗戦をもって終わり、その荒廃の中から起ちあがって、私たちは新しい時代に向かって発足した。戦時下に一時休刊の止むなきに至っていた岩波新書も、装幀を赤版から青版に改め、一九四九年、希望をもって再出発することとなった。当時なによりも必要であったのは、敗戦後の厳しい現実を隠すことなく直視し、広い視野と冷静な認識とをもって、激動の時代に立ち向かう勇氣であった。自主的な精神の確立は、民主主義の時代を迎えて一層欠くことのできない要件となった。「現代人の現代的教養」という創刊の標語も、この新たな現実の中で、さらに進んだ積極的意味をもつこととなった。かくて再出発以来二十余年、時代の課題を次ぎつぎ追いつながら、政治・経済・社会・文化・自然科学等の分野にわたって、七百五十余点を刊行しつづけて今日に至った。

いまや一九七〇年を迎え、戦後の歴史はふたたび大きく転回しようとしている。国際的にも国内的にも未曾有の変動を経て、今日私たちは、戦争直後とは全く一変した政治的・社会的現実に当面し、かつてない深い思想的混乱をも迎えている。知らねばならぬこと、考えねばならぬ問題は山積して、日日、私たちの前に立ちほだかっている。しかし、その中にあって、知性をもってこの時代閉塞を切り拓こうと努めている人々、この困難な時代を真摯に生き抜こうとしている人々は、けっして少数ではない。私たちは、その人々を読者とし、その人々の要請にこたえる精神の糧を提供することこそが、今日この双書の果さねばならない課題であると信じ、この双書の使命を思いかえしつつ、さらにさらに前進をつづけたいと思う。読者の御支持を心から期待する。(一九七〇年三月)

目次

はじめに	一
第一章 われわれの時代のムード 人間疎外の意識	二
第二章 技術と疎外	三
第三章 政治と疎外	四
第四章 社会構造と疎外	五
第五章 回顧と展望 疎外は克服できるか？	一七
感謝の言葉	一八
キューバ革命の展望から見た疎外に対する闘争	二二
あとがき	二七
原註	
索引	

はじめに

ゴヤの『カプリーチヨス』〔聖職者や政治・風俗などを諷刺した銅版画の連作。ヘカプリーチヨスとは思いつきという意味〕のなかに、この画家が『齒を求めて』と名づけた作品がある。その銅版画エツチングは絞首刑になった男の齒には魔法の力があるという迷信にとりつかれた女が、わなからぶらさがっている死体へしのびよっているところを描いている。一片の布を手にもって死体から顔をそむけている女の気持ちは、恐怖と貴重な齒を手にいれようとする決意との間に引き裂かれている。つま先き立ちで、腕をのばし、不意におそってくる恐怖におののきながら、女はこちこちになった死体の口へ手をさしのべているのである。

これは遠い過去となった時代の病的な状態を示すものだろうか？ われわれはこうした解釈で安心してはいられない。ゴヤの銅版画エツチングは今日の世界でも意味を失ってはいない。その証拠はいくらかもある。数年前ある通俗雑誌が写真コンテストの結果を発表したことがある。ほやほやの現場ニュースをとった写真に賞が与えられた。入賞写真の一つは二台の自動車がめちやめちやにこわれた交通事故をとったもので、犠牲者の一人の、死の直前の苦痛におそわれた顔を写

していた。

ゴヤの銅版画^{エッチング}の女の動機とコンテストでうまく賞を射とめた写真家の動機とは、まったく別のものであったろう。一方は迷信に駆られたものだったし、他方は金銭上の利得ないしは世間に認められたい欲望に動かされたものだった。しかし、この二人の間にはある種の類縁があるように思われる。二人とも自分たちの利益をしゃにむに追求することで夢中になっていて、そのため彼らが現実と出合う場面のすべてが、そういう追求によってつくりあげられているのである。彼らの経験するものは、どれ一つとしてそれ自体では意味をもたない。彼らの目的を達成する手段になりうるものでなければ、どんなものも彼らにとっては値打ちがない。死でさえも例外ではない。死に面^{めん}と向いながら、彼らはただその一つの面、自分たちにとって有利だと計算する面だけにしかかかわりをもつことができない。そして他方、彼らにとっては無用な残りの部分である他の一面、つまり死の衝撃そのものに対しては、彼らは無関心な見物人にとどまっているのである。

こうした冷淡さや関与の欠如ということは、たんにゴヤの銅版画^{エッチング}のなかの女や、他の人間の苦痛を目撃しながら、もっぱら自分のカメラを使うことばかり考える写真家のような人たちだけの特徴だと言えるだろうか？　こうした気休め的な考えは現実的ではないと思う。われわれ

は誰でも無関心な傍観者になる傾向をもっているように見えるのである。他の人たちと交際したり、また重大な出来事に反応したりする場合、われわれにはとかく断片的な出会いしかもないような傾向がある。われわれは全体としての他の人物、または全体としての事件にかかわりをもたないで、むしろわれわれにとって重要な一つの部分を切り離して、残りの部分に対しては多かれ少かれよそよそしい観察者にとどまっている。

かように現実を二つの部分に引き裂く人は、自分自身の自我においても分裂におちいる。ゴヤの銅版画エッチングのなかの女を引き裂いている裂け目は非常に深い。画家はこの女をたがいに引き離されている二人の人間として、すなわち欲しくてたまらない目的物の方へ動いている一方の人間と、自分自身の行動からみじめにも顔をそむけている他方の人間として、描いているように思われるくらいである。自分自身にとって見知らぬ他人になってしまった人間の状態には何か不気味なものがある。しかし、それがわれわれの多くの者の生活を形づくる運命なのである。われわれは恐ろしい矛盾にとらえられているように見える。われわれ自身を個人として確立するため、われわれは現実のさまざまな面のうちでわれわれの目的の達成を助長するものだけにかかわりを持ち、その残りの部分からは絶縁したままである。しかし、この分離を押しすめてゆけばゆくほど、われわれ自身の内部における裂け目もますます深くなってゆくのである。

自分の夫の出世ということに心を奪われて、自分がひきつけられる人たちよりも、むしろ「然るべき人たち」のなかから友人を選ぶ、いわゆる「社交向き女房」^{ソシヤル・ウイフ}、社会的名声上の理由から、または職業上ないし商売上の利益を考慮するところから、自分の宗教上の背景や信仰を代表する教会よりも、むしろ比較的高い程度の社会的尊敬を与えてくれるような教会に加入する人たち、あまり人気のない政治的目的のために闘っていては、再選の見込みがぶちこわされてしまうかもしれないことを悟って、政治家としての自分の将来を確実にするために、自分の信念を放棄してしまふ政治的指導者、創造的なものではあるが、一般に受けいれられない思想を自分の立場としていながら、孤独な芸術家としての苦闘をあきらめて、魅力的な報酬や安性のために広告業の仕事を引き受けてしまふ画家——すべてこういった人たちが明らかにしていることは、現実から疎外されている人たちが、もはや自分自身とは別な人間になってしまっているということである。

個人が何事によらず自分の利益追求と関係のないものからは疎外されるという事実は、必ずしもその人の意識にのぼるとはかぎらない。また、いつも自分自身の自我からの疎外に気づいたり、それを不安な経験として感じたりするわけでもない。その冷淡な態度の結果として、疎外された人間はしばしば大いに成功を収めることがある。そうした成功が続くかぎり、それは

ある種の無感覚を生みだす。したがって、その人が自分自身の疎外を自覚することはなかなかむずかしい。危機の時になってはじめて、それを感じはじめるわけである。

社会もまた疎外へ向う傾向をしばしば平然として受け入れる。この事実が「疎外」という言葉の歴史によって例証されている。哲学的な意味では、この用語は十九世紀のはじめにフィヒテとヘーゲルが用いたものである。もっとも、その当時にはその影響は彼らの弟子たちの小さな集団にかぎられていた。それは同じ世紀の四十年代に社会学説のなかにはいつてきた。マルクスが自己疎外の概念を中心において、資本主義時代の解明を試みたからである。しかし、この概念が影響を及ぼしたのはほんのわずかな間で、その後の時代にはほとんど忘れられてしまった。今日、ほぼ百年後になって、この概念がふたたび前景に現われてきた。そしてほとんどはやり言葉にまでなっている。マルクスの思想にほとんど同情をもっていない人たちの間でさえそうである。おそらく、これは何年かにわたって続いている危機が、否応なしに人間疎外の問題をわれわれに意識させたためであると思う。

今日では人間の疎外についての懸念が、多くの人たちによって表明されている。神学者たちや哲学者たちは、科学的知識の進歩は存在の神秘を解く力をわれわれに与えるものでなく、また認識者と彼が理解しようとする現実との間の裂け目を埋めないで、むしろそれを拡大する場

合が多いことを警告している。精神医学者たちは、彼らの患者たちに助力して幻想の世界から現実へ立ちもどらせようとしているし、ますます盛んになってゆく生活の機械化に対する批判者たちは、技術上の進歩が自動的に人間生活の豊富化に導いてゆくだろうという樂觀的な期待に対して疑問を提出している。また、政治学者たちは、民主的な制度ですらも、われわれの時代のいろいろな大問題にほんとうの意味で大衆を参加させることができなかったことに注目している。

こうした見解のいくつかについては、この本の最初の何章かでもっと詳しく述べるつもりであるが、それらは社会学者であり哲学者でもあったゲオルク・ジンメル〔一八五六一一九一八年、ド〕が五十年前に展開した思想にまでさかのぼるものである。それはまた、後になって、実存哲学の代弁者たちや、ローマ・カトリックの学者ロマーノ・グアルデーニ〔一八八五年、ドイツ〕その他がはっきり表明したものである。こういう著者たちは、人間疎外のいくつかの重大な事例を理解する上に、大きな貢献をした。しかし、この人たちはもっぱら疎外の特殊な形態を検討することに気どられていたために、そうした形態にどんな相互関係があるのかということも分からなかったし、またそれらの外見上ばらばらな現象は、現代の支配的傾向の一部をなすものではないかどうか、ということも問題にしなかった。この問題の提出をおこたっているかぎり、われ

われはこの問題をほんとうに理解することができないと思う。疎外された人間が苦痛や衝突にさらされている状況に直面しながら、われわれは自分たちの苦悩を不運な災難のせいだと考えるだろう。われわれは疎外のもつ固有な力と取り組むことをしないで、たんにノスタルジアや悲しみの感情で、または泣き言や空虚な抗議でそれに反応するだけだろう。

この本ではそうした誤謬におちいらないようにしようと思う。ヴィルヘルム・ディルタイ〔一八三三—一九一一年 ドイツの生の哲学者〕は、一つの時代を形づくるエネルギーのいろいろな現われは相互に似かよっていると言ったが、この洞察は疎外を理解についてもあてはまる。疎外の個々の形態に氣づかれて、それらの間のつながりを見失ってはならない。外見上ばらばらなこうした表現が同一の源泉から、すなわちわれわれの時代とその社会構造との基本的な方向から、出てくるものでないかどうかという問題を、議論もしないうちから、却下してしまうようなことはゆるされないのである。

しかし、われわれが疎外を人間の条件に根ざすものと見ないで、特定の歴史的時期に關係させることは、問題をあまりにも単純化することにならないだろうか？ 多くの読者はこういう問いをここで提起するだろうし、またこの本の他の部分へ読みすすんでゆくにつれて、同じ問いを繰り返すだろう。著者にとって、これは一つの重大な挑戦であると思う。著者は終りの何

章かで、詳しくそれに答えるつもりである。ここでできることは、起りうる一つの誤解について警告しておくことくらいなものである。疎外の力がわれわれの時代を支配しているという命題は、それ以前の時代にはそういう力は存在しなかったという意味ではない。この命題が実際に主張しているのは、そうした力が近代世界において非常な強度と重大性をもつようになったということである。この事態をわれわれの時代の社会構造と関係づけることが、この本の狙いなのである。

この仕事をやってゆくために、われわれはマルクスのいくつかの初期の著作、なかんずく『経済学・哲学草稿』（一八四四年）に立ちかえるつもりである。この草稿については、現在フランス、ドイツおよびイギリスで大いに論じられているが、アメリカではまだそれについてほとんど知られていない。アメリカの読者にこの草稿の重要性に注意させることも、われわれの目的の一つである。これまでこの『草稿』は一部分しか英語に翻訳されていないからである。この理由から、われわれはかなりたくさんこの草稿から引用した。とくに第四章においてそうである（完全な英訳が一九五九年にモス・クワとイギリスで出版された）。

マルクスのこの著作に関する論争は、いまなお、一方ではそれを独断的に弁護し、他方では感情的に排斥するといった有様である——と言うより、今日ますますそうなっているのである。

したがって、われわれが『草稿』から抜萃した文章が、その一つでも、平静な、偏見のない態度で検討されることを期待するのは、大胆きわまることかもしれない。しかし、非常に忠実な信奉者でも、ここに示されているマルクスの思想が、普通にマルクスの説とされている見解としっくりしないからといって、それを無視することはゆるされないし、また、非常に断乎たる反対者でも、敵のほんとうの立場と強味とを過小評価しようとする傾向が、これまでいつも誤謬を生みだし、そのために高い代価を支払わなければならなかったことを、悟らなければならぬのである。

われわれはまた、フェルディナント・テンニエス(一八五五—一九三六年、ドイツの社会学者)の著作についても考察するつもりである。というのは、彼の著作は、われわれの見解によると、人間の疎外と社会との関係を理解する上で、大きな貢献をしたものだからである。このドイツの学者の名前はすでに一九〇六年に、『アメリカ社会学雑誌』の編集顧問のなかに見出されるのであるが、彼の著書『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』は、社会学の多くの教科書や論文に引用されているにもかかわらず、ほんとうには吸収されなかったし、またこれまで割合に知られていなかった。この本については、過去へ帰りたいノスタルジア的な気持ちから書かれたものだという解釈が広く行われていたため、多くの社会学者はそれの永続的な意義を認めることができないでいた

のである。しかし、われわれはテンニエスのこの著作が大きな意義をもつものであることを信じている。この著作の基本概念は、歴史的現実のなかに包まれている社会構造を、その現実から切り離さずに、分析できるようにしてくれるものであって、近代社会の動いてゆく方向について重大な洞察を与えるものである。

著者はこの論文が無私な中立の精神で書かれたものでなく、一つの前提にもとづいていることを承認する。疎外の力に支配されている社会は人間の潜在的可能性を窒息させてしまい、こういう社会では個人の尊重、人間の品位の尊重ということも、本物にはならず、あくまでも思想上、哲学上の発言という範囲を越えないだろう、というのが著者の確信である。この本の動機となっている価値判断が、その客観性を奪っているかどうかは、読者の判断におまかせしようと思う。

第一章 われわれの時代のムード 人間疎外の意識

都市や橋、技術上の設備や経済・金融上の機関の復興の方が、現代の戦争のために破壊をこ
うむった世界の精神の再建よりも、急速に進んでいるように見える。第二次大戦後のヨーロッ
パから、われわれのところへとどいたさまざまな報告は、ともかくもこの点だけでは一致して
いるようである。物理的再建が驚異的なスピードで行われてきたにもかかわらず、ヨーロッパ
の思索は、いまなお陰鬱さと絶望とによって、強くとらえられているように見えるのである。

こうした悲観的見方への転向を、たんにこんどの戦争の結果や新しい戦争の恐怖から説明
するのは、あまりにも単純な見方だと思う。西欧文明として知られている、世界のこの部分が、
長い間にわたって内的な危機になやんできたことを見逃してはならないのである。現在見られ
るニヒリズムへの傾斜は、信念——人間の偉大さ、かぎりない進歩、理性の主権などの信念
——の普及をその特色としていた十八、十九世紀のあとをうけて出現した懐疑的ムードの新た
な表現なのである。